
神のみぞ知るセカイ(world God only knows)

柘榴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神のみぞ知るセカイ (World God only knows)

【Nコード】

N9461S

【作者名】

柘榴

【あらすじ】

ギャルゲーマーの中で知らない人はいない天才ギャルゲーマー『桂木桂馬』がひょんなことから現実リアルの女子を恋に落とす事！
見習い悪魔のエルシイと共に心の隙間に潜む『駆け魂』を捕まえるため、ゲームの知識を使い、女子攻略に挑む！！
果たして桂馬&エルシイは無事駆け魂を捕まえることができるのか？

(この作品は原作にも登場しているキャラクターに加え、主のオリ

ジナルキャラクターも登場します)

FLAG 1: world God only knows

『フ、ゲームクリアっと、やはり日曜日は最高だな、いくらでもギャルゲーに時間を費やせるのだから!』

僕の名前は桂木桂馬、ギャルゲー界では落とし神と呼ばれているほどの天才(自分で言うのも何だが)ギャルゲーマーだ。

『神に〜さま〜、ゲームばかりしてないでせっかく作ったんですから朝ご飯食べて下さい!』

こいつの名前はエルシィ、悪魔だ…こいつが地獄から来たせいで僕のゲーム三昧の日々が一転してしまった…

全く、現実はどこまで僕につきまとうんだ?

FLAG2...耳寄りな情報(前書き)

「心」は桂馬、「」はエルシイです

FLAG 2…耳寄りな情報

『いらんわ！なんだこのウネウネした生物は！』

「それは冥界ワカメの味噌汁です！腕によりをかけて作りました！」
『この世のどこに自走する味噌汁があるんだよ！！』

『たく、とりあえず味噌汁はいら…』

メールだよ！

桂馬の持っているPFPがメールを受信した

『なんだ？こんな朝っぱらから？…な、なに〜！！』

「きゃああああ！！！！に、に〜さま！いきなり大きな声を出して
どうしたんですか！」

『今僕のサイトを見ている奴から耳寄りな情報が入った、から ぶ
るの初回特典版が売ってたらしい、今すぐ行くぞエルシィ！！』

「あ！待って下さいよ〜」

FLAG3… 駆け魂（前書き）

文を書くのは難しいっすね（^| ^ ; ;）

ちなみにスミレを出したのは結構好きなキャラクターだからです

FLAG3…駆け魂

『ゲーム！ゲーム！』

「に〜さま！待って下さいよう！全くゲームのことになるといつてもこうなんだから…」

『着いたぞ、合った！コレだ！ヒャッホー！！』

「神様が気持ち悪いです…」

《ふん、ギャルゲーなんてどこか面白いのかしら？》

『いきなり誰だ！！お前にはこのゲームの素晴らしさが分からないのか！？』

《ふん、私の名前は村上穂、恋愛ゲームなんてどこが面白いのよ？みんな顔同じじゃない》

『見よ！この素晴らしいスタイル、これこそ理想の女性、よっきゅんだ！』
桂馬は手に持っていたPFPの画面を見せつけた

《何それ？ホラーゲームなの？》穂は冷たく言い放った

『なっ！よっきゅんを侮辱したな！よっきゅんは僕のヒロインだぞ！絵が悪いのは絵師のせいだ！』穂に言われて動揺を隠せない桂馬

《まさかそんなヒロインがいたなんてね…やっぱり恋愛ゲームより

現実の恋愛…」

と彼女が言いかけたそのとき！エルシィの持っている駆け魂リーダーがなりだした

『「！……！」』

「うるさいわね、まあともかく、じゃあねえ、見る目の無いギャルゲーマーさん」

そう言い残すと彼女はゲームショップから出て行った

「神様、あの子に駆け魂がとりついています！今すぐ攻略しましょう！」

『待て、とりあえず情報が欲しい…あの学校の制服は鳴沢市立第三高校…今からスマイレのとこに行くぞ！』

FLAG 4…情報収集（前書き）

文書くのはへタクソですが、そこらへんはご勘弁m | | m

因みに
むらかみみのり
…村上穂と読みます

FLAG 4…情報収集

ここはすみれ屋、鳴沢市にある評判のラーメン屋だ、

あれ？桂木じゃない？久しぶりね、何のラーメンにする？

この子は上本スマレ、スマレ屋の店主だ。以前僕が攻略した女子である

『いや、今日はラーメンを食べに来たわけじゃ…』

桂馬が言いかけたそのとき！

「甘ラーメン2つ！」エルシィが元気よく言い放った。

かしこまりました、甘ラーメン2つ

『余計な事を…』

桂馬は元々甘いものが苦手だ、さらにスマレ攻略のときに嫌になるほど甘いラーメンを食べさせられている。

「一度でいいから食べてみたかったんですよ」

桂馬のことはお構いなしのエルシィだった

へい、おまちどうさま

スマレがラーメンを運んできた

エルシィはあっという間にラーメンを完食したが桂馬はエルシィの三倍以上の時間をかけてラーメンを食べた

『話を戻そう…』

桂馬は村上穂についてしつていっていることを聞いた

村上さん？村上さんはかなりのゲーム好きだね。それにゲーム以外のことはあんまり興味無いみたい。だからあんまりしゃべったことないよ、

『なるほど、とりあえずゲームをやるようだな…フ、ゲームで僕に勝てると思っっているのか？』
桂馬は心の中でほくそ笑んだ

（「に」さまにそっくりな人ですね…ゲーム以外に興味が無いところか…」）
エルシイは思った。

そういえばこの前ゲームセンターの前で見かけたよ

『それはいい情報だがとうスミレ、じゃあまた来るよ』

う、うん…（なんでこんなにドキドキしてるのかな？私…）
そう言い残すと桂馬とエルシイは店をでた

FLAG 5…ゲームセンター

ここは鳴沢市にある大きなゲームセンター…何十種類のゲームがあり、若者たちの憩いの場である

『ここにあいつがいるのか？こんなに広いと捜すのだけで一苦勞…いた！』

ケイマハミノリヲミツケタ！！

《ん？あんたはさっきの見る目の無いギャルゲーマー…》穂はシューティングゲームをしながら言った

『誰が見る目の無いギャルゲーマーだ！』桂馬は怒鳴った

《ハイハイ、さっきの見る目の無い人ね》

『誰が見る目の無い人だ！僕の名前は桂木桂馬だ！くそ許せん！お前！僕とゲームで勝負だ！』桂馬は言った

《この私に勝てると思ってるの？ここらへんのゲームは負けたことはないわよ？》

穂は自信たっぷり言った

『フ、お前こそ誰にもものを言っている、神に勝てると思っているのか？』

《まあいいわよ、じゃあこのシューティングゲームで勝負よ》
『いいだろう…ゲームスタートだ！』

バン！バン！、チャラリン！

二人の銃の音（といつてもゲーム内だが…）が響く

ゲームクリアー！！！！

ケイマ：53475点

ミノリ：50840点

…ケイマノカチ〜！

《な…私が負けた…もう一回よ！！私が負けるなんて有り得ないんだから！》

『止めておけ、何回やっても無駄だ、お前は僕に勝てない』
桂馬は言った

《く、もういい！！》

穂は走ってどこかに行ってしまった

「穂さん、泣きながらどこかに行っちゃいましたけど…」

『問題無い、エルシィ、レーダーで穂がどこに行ったか分かるか？』

「は、はい！え〜っと…分かりました！昨日のゲームショップです
「！」

『よし、ならば行くぞー！』

FLAG 6 : 駆け魂の力 (前書き)

駆け魂の力でこんな事出来んのかな…？

FLAG 6… 駆け魂の力

「でも神様、いくらなんでもやりすぎですよ、穂さんを泣かしちゃうなんて…」

『うるさい！まさか泣くとは思わなかったんだよ！』
無責任な…とエルシイは思ったが声には出さなかった

『とりあえずゲームショップへ急ぐぞ』

その頃穂は…

《ムカつく！ムカつく！ムカつく！》果てしなくイライラしていた

《何が僕には勝てないだ！偉そうに！やっぱり男なんてみんなそう…
あゝイライラする！こういう時は何かゲームを買って帰ろうっ》

《あつ、バイロハザード4！あつたんだ…よし！コレを買おうか…》

「『見つけた！！』」

《あ、あんた、なによ！私に何の用…

えっ、きゃああああ！》

なんと穂はゲームの中に吸い込まれてしまった！

「な！穂さんがゲームに吸い込まれちゃいましたよ！」

『駆け魂の力か！ゲームの中に入れるなんてなんとつらやましい…』

「そんな事言ってる場合じゃ無いですよ！どうしましょうっ？」

『とりあえずあのゲームを買ってかえるぞ』
桂馬は落ちているゲームを拾って言った

バイロハザード4を買い、桂馬達は家に戻る事にした

FLAG 6 : 駆け魂の力（後書き）

次回、本格的に穂攻略開始？

FLAG7…神様も？（前書き）

自分の小説の桂馬はいい奴過ぎたか…？

FLAG7…神様も？

桂木家…桂馬の部屋

『このゲームを起動してみるか…』

【バイロハザード4】

【このゲームはゾンビ達を太陽光線銃で倒しながらお姫様を救うゲームである、】

「ホラーゲーム…怖いのは苦手です」
エルシイは半泣きになりながら言った

『それなら僕の部屋から出て行けばいいだろう』
桂馬は溜め息混じりにつぶやいた

「そうします」
と言い残し、エルシイは桂馬の部屋を出た

『ホラーゲームか…楽勝だな！よし、はじめる、か…ん？うわああああ！』

なんと！桂馬までゲームの中に吸い込まれてしまった！

…ゲームの中？…

《此処はどこ？…確か私はあの男と話して…それで目の前が真っ暗になって…ていうか、なによこの格好！》
穂はフリルのドレスを着ていた

《もう、ワケわかな…》
イライラしながら穂がつぶやきかけたとき

【ウガア！】
突然現れたゾンビが襲ってきた！

《きゃあ！なによコイツ！とりあえず逃げなきゃ！》
穂は逃げ出した

その頃桂馬は…
『此処がゲームの中か？くそお…どうせゲームの中に来るんだっ
らよっきゅんが出てくるゲームが良かった！』
意外に大丈夫そうだった…そのとき

【ウガア！】
物陰からゾンビが襲ってきた！

『…なんだお前？ブサイクな顔だな』
…桂馬は冷たく言い放った

【ウガア…】
ゾンビは精神的に大ダメージを受けた

【ウガア！】
ゾンビは怒って暴れだした！

『うわっ！危ない！』
桂馬は間一髪のところまで右によけた

『くそ…どうすれば…ん？』

桂馬の足下に銀色の銃が転がっていた

『コレがさっき書いてた太陽光線銃か！よし！行くぞ！』
サン・デル・ソル

バン！

【ウガアア…】

ゾンビは消滅した

『フ、口ほどにもない…』 しかし穂はどこにいるんだ？とりあえず
…あの塔に行ってみるか』

FLAG8…神様の言つとおり？（前書き）

はい、今回本格的に穂の心の隙間に迫っています（因みに関係無いですが今日コナンの映画を見に行って来ました）

FLAG 8…神様の言いつとおり？

《ハア、ハア、ハア…しつこいわね…！ドコまで追いかけてくるのよ！》

穂は走り続けた

《うそ…行き止まり…？》

【ウガア】

《イヤ…来ないでよ！》

穂は足下に落ちていた石ころをゾンビに投げつけたが、ゾンビは難なくかわした

《イヤ…来ないで…助けて…助けてよ…！》

穂は大きな声で叫んだ

そのとき！

バン！

一発の銃声が響いてゾンビが消滅した

『全く、ウルサイ奴だな…』

そこには桂馬が立っていた

『もう少し静かにし…』

《桂馬あゝ！怖かった！怖かったよお…》

『（僕に抱きつくな…！）』

桂馬はいきなり穂が抱きついてきてかなり動揺していた

数分後：

《なんであんななんかに抱きついたらだろう…私としたことが不覚…》

穂は何時もの調子を取り戻しつつ言った

『知るか!!』

桂馬はまだバクバクする心臓を抑えながら言った

《別にあんたの事が好きな訳じゃないからね!勘違いしないでよ!男なんて…》

穂は顔を赤めながら言った

『ずいぶん男を毛嫌いするな?何故だ?』

桂馬は尋ねた

《…昔大好きな人がいたの…そんでその人に告白したの…でもオタクは嫌いとか言われてフラれたの…いつだって男は身勝手に、自分勝手なものよ》

穂は歩きながら言った

『ふん、なんだ、フラれただけか…』

桂馬は言った…すると顔に穂のグーがとんできた!

『ぶごお!!』

桂馬は吹っ飛ばされた

《何がフラれたただけだよ!あんたみたいなオタクなんて人に全力で愛情を注いだこともないんでしょ!?!》

穂は怒鳴った

『僕は…どんなゲームのヒロインにでも全力の愛を注ぐ!!』
桂馬は起き上がりながら言った

《そんな…嘘よ!ゲームのヒロインに愛情なんて…》

【見ツケタゾ、姫ヨ…】

低い声がどこからともなく聞こえた

『《!!!!》』

【早く、ゾンビノ王、ダークゾンビマスター様ノ花嫁ニナルノダ…
結婚式ノ準備ハモウデキテイル…ワガ城デ結婚式ヲアゲルノダ】
そう言うと穂を軽々と抱えるとゾンビマスターは闇夜に消えてしま
った…

『み、穂…!!くそ!待ってる穂!必ず助けに行くからな!』
桂馬はダークゾンビマスターの城に向けて走り出した!

FLAG: Love Power

…城…

【ナカナカ似合ウゾ、姫ヨ】
ゾンビマスターは満足そうに言った

《イヤよ！誰があなたなんかと結婚なんて！》

【威勢ガヨイトコロモワガハイ好ミダナ、サア結婚式ヲハジメヨウ】

《イヤア！助けて！桂馬！》

穂は大きな声で叫んだ！

『やれやれ…相変わらずウルサイ奴だな、おいブサイクゾンビ！早く穂を返せ！』

【ゾンビノ王ニ向カツテブサイクトナ…許サン…許サンゾ…！】
なんと！人型だったゾンビマスターがドラゴンに変身した！

【ドウダ、オドロイタダロウ】

『…どんなゲームのボスでも第二形態はあるものだ、それぐらいで驚くワケ無いだろう、コレでもくらえ！』
バン、バン、バン！

銀色の銃から銃弾が撃ち出され、ドラゴンの顔に全弾直撃した！…
が…

【痛クモ痒クモナイナ！今度ハワガハイノバンダ！】
ドラゴンは口から炎の球を桂馬に向けて吐き出した！

『ウワアアア!』

桂馬の体は吹き飛ばされた!

【フン、口ホドニモナイ…】

『ま…まだ…終わって無い…ぞ!』

桂馬は最後の力を振り絞って立ち上がった

《桂馬!私のことはいいから逃げて!》

『何を言っ…てるんだ?さっきも言っただろう、僕はゲームのヒロインには全力の愛情を注ぐ…だから今僕は穂に全ての愛を注ぐ!』
そのとき!銃が光り出した!

『銃が…光り出した?』

「説明しよう!太陽光線銃は姫に対する愛が強ければ強いほど威力が増すのである!…それでは!」

『誰だ?あいつは?まあいい…くらえ!ブサイクドラゴン!』

桂馬は光り輝く銃を手にとり撃った!

【ウガアアア!】

ドラゴンは消滅した…

『やった…ゲームクリアだ…』

《桂馬あ!》

穂は桂馬に抱きついた!

『イタタタタ！怪我人に抱きつくな！』

そんなやりとりをしていると二人の体が光に包まれ…

ドシン！

『イツテエ…ここは…僕の家…どうやら帰ってこれたみたいだな』

《良かった〜帰ってこれた〜！》

『…とりあえず僕の上からどけ…』穂は桂馬を下敷きにしていた

《とりあえず家に帰りたいんだけど…》

『仕方ないな…送っていつてやる』

…桂馬と穂は家をでた

『…』

《…この辺でいいよ…》

『そうか…』

《今日はありがとう…助けてくれて…》

『またいつでもゲームで勝負してやるよ』

《今度は負けないよ！あと…守ってくれてありがとう、私の王子様
！》

穂は桂馬の唇にキスしてきた

穂の体から駆け魂がとび出した

…そのころエルシイは…

「ふゝ庭のお掃除終了〜！ん？駆け魂！あっ！待って〜！」

「駆け魂勾留〜！」

エルシイは無事駆け魂を捕まえた

FLAG 10...MINORI SONOGO (前書き)

これにて穂編、終了！

FLAG 10...MINORI SONOGO

穂はゲームショップに来ていた

《うーん…なんのゲームを買おうかな…》

《…恋愛ゲーム…か…まあたまにはこういうゲームを買ってもいいかな!》

《穂は恋愛ゲームに手を伸ばした…》

ドキンッ!

《な…何!今の!胸がドキドキする感じ!…何か忘れてるみたいだけど…思い出せない…何か大切な人を忘れてる気がする…うーん…まあ気のせいかな?》

穂はゲームを手に持ってレジへ向かった

…そのころ桂馬は…

『うーん、うーん』

全身筋肉痛だった

「なんでゲームをクリアしただけなのにそんなに疲れているんですか?」

『うるさい!…うーん体中が痛い…』

「まあともかく、攻略お疲れ様です!にーさま!」

『本当に疲れた…ゲームの世界も楽しじゃ無いんだな…』

「？」

穂編
…
e n d

FLAG 11…落ちこぼれアイドル（前書き）

穂編もグダグダながら終わり、新しいお話に入りたいと思います

FLAG 11…落ちこぼれアイドル

ここは鳴沢音楽会館…今日はそこで【国民的アイドル賞】の発表があった

「さあここで、名誉ある国民的アイドル賞、受賞者の発表です！受賞者は…中川かのんちゃん！おめでとう！」

会場から大歓声が上がった！そこら中からかのんコールが聞こえる

「それではかのんちゃん、今の気持ちは？」

司会者がかのんにマイクを向ける

こんな素敵な賞が貰えるなんて夢みたいです！ファンの皆さん本当にありがとうございます！

再びホール中から歓声が上がった

しかし一人、影で寂しそうな目をしている少女がいた

《なんでかのんちゃんばかり…私だって頑張ってるのに…》

ところ変わって桂木家…

「にーさま！かのんちゃんが国民的アイドル賞受賞ですよ！」

『国民的アイドル賞？なんだそれ？』

桂馬は興味が無いらしい、ずっとゲームをしている

「にーさま知らないんですか？！国民的アイドルに贈られる名誉ある賞ですよ！」

『しかし最近は何んでも賞をつくるな…』

「明日かのんちゃん学校に来るかな？来たらお祝いしたいな！」

…そして次の日…

「にーさま！かのんちゃんです！かのんちゃんが学校にいますよ！」
エルシイは興奮して桂馬に言った

『この学校の生徒なんだから来てるのは当たり前だろう…』

「かのんちゃん！受賞おめでとう！」

うん！ありがとう！

かのんは笑顔で応えた、するとまわりにいた生徒が口々に

かのんちゃんおめでとう！やらかのんちゃん結婚して！やら叫びだし、ものすごい賑わいになった

しかしそんな賑やかなムードの中、一人だけ寂しそうにかのんを見つめる少女がいた

《やっぱりかのんちゃんばかり…みんな私を見てくれない…》

ドロドロドロドロ

エルシイの駆け魂リーダーがなりだした！

「にーさま！この辺りに駆け魂がいます！えっと…分かりました！あの子です！」

エルシイは、寂しそうに見つめる少女を指差した

指を差さされた少女は逃げ出した！

「あつ！逃げちゃいました！」

『お前が指を指すからだ！このバカ！』

今の…茜ちゃん？

『知ってるのか？かのん？』

桂馬は尋ねた

うん、知ってるもなにも…茜ちゃんも歌手だよ？

『話を詳しく聞かせてくれ！…しかしここじゃファンの奴らが邪魔だ…かのん！放課後屋上に来い！』

そう言い残すと桂馬は去っていった

FLAG 12…茜

放課後…

ここは屋上…人も僕たちしかおらず、朝の賑やかさが嘘のようだ

桂木くん…

『やっと来たか…遅いぞ、かのん』

桂馬は先に屋上で待っていた

「ご、ゴメン！学校に来れなかった時に出された課題を…（何か桂木くとあつた気がする…思い出せない…）」

『まあいい…それよりもさっきの奴は誰だ？』

桂馬は尋ねた

あ！彼女は柊茜ちゃん2年C組の子で、歌手をやってるの…でもあまり売れなくて…

「茜さん、歌手だったんですか？全然知りませんでした？」
…エルシィにはデリカシーが無いらしい…

『ふん、アイドルはこの世界に何万といるんだ…そんな簡単に売れるわけ無いだろう』

…桂馬には夢というものが無いらしい…

『とりあえず、茜のことはわかった、ありがとう、かのん』
桂馬は礼を言うと屋上をあとにした

『まずは茜に接近してみるか…。エルシィ！明日茜にあいに行くんぞー！』

FLAG 13…落ちこぼれと神様(前書き)

自分の話では桂馬君、よくポコポコになります) . . . (

FLAG 13…落ちこぼれと神様

次の日の放課後…

《ふう…夕日がきれいだな…》

茜は屋上に来ていた

《…》

『お前、1人でなにしてるんだ？』

いつの間にか茜の横に桂馬が立っていた

《きゃあ！》バコーン！

桂馬は茜に振り向き様に殴られてしまった…

『ぐえっ！…！』

桂馬は吹っ飛ばされた！

『なんで…お前らリアルの奴らは急に殴るんだ…』

桂馬は吹っ飛ばされてクラクラする意識の中で何とか立ち上がった…

《あつ、えつと…ゴメンなさい…！》

『…ドラゴンの攻撃よりも痛い…』

《…？とりあえず血！顔から血が垂れていますよ…！》

茜が慌てながら言った

『お前がやったんだがな…』

《スイマセン…あの…とりあえず動かないで下さい》
茜はカバンの中から救急箱を取り出した

《少ししみますよ〜》

茜は消毒液をハンカチに染み込ませ、桂馬の傷口に当てた

『イッテエー!』

《もう少し我慢して下さいね》

『…』

《コレでよし!》

『ありがとう…ってだからお前がやったんだがな…』

《うう、スイマセン…》

茜はしょんぼりしてしまった

『お前歌手なんだろ?』

桂馬は尋ねた

《!!私のこと知ってるんですか!?!》

今までしょんぼりしていたのが嘘のように茜は元気になった

『ああ…まあな…』

茜に急に迫られ桂馬は焦っていた

《嬉しい!!私のことを知ってる人がいたなんて!》茜は飛び上がって喜んでいた!

『（現金な奴だな…）』
桂馬は思ったが声に出さなかった

《あの！アナタの名前はなんて言っんですか？》

『桂馬…だけど…』

《桂馬君！これからよろしくね！》

『ああ…こゝ、こちらこそ…』

《あっ！もうこんな時間！そろそろ帰らないと…じゃあね！桂馬君
！》

そう言い残し、茜は屋上から出て行った

FLAG 14 … 落ちこぼれと神様 (その2) (前書き)

僕の憧れ膝枕 (笑)

FLAG 14…落ちこぼれと神様(その2)

次の日の放課後、茜は再び屋上に夕日を見に来ていた

《そういえば桂馬君の名字聞いてなかった…もう一度あつて話たいの…》

『僕の名前を呼んだか？』

…どこから湧いて出て来たのか、桂馬が茜の後ろに立っていた

《きゃあ！》

『おっと、二回も殴られ…』

シュツ！

茜は振り向きざまに見事な回し蹴りを放った！

『フギヤツ！』

グーが飛んでくと思った桂馬は、回し蹴りには対処出来なかった…茜の足は桂馬の顔にクリーンヒットした

『なん…で…』 バタリ

《桂馬君！大丈夫！？》

桂馬を蹴り飛ばした本人が言った

『(かのんにしろ茜にしろ…アイドルはすぐ攻撃してくるな…)』

《とりあえず怪我を見るのでベンチに座って下さい！》

桂馬は体を引きずりベンチに座った

《横になって下さい》

『お前が座ってたら横になれないんだが…』

《？私の膝に頭をのせれば良いじゃないですか？》

茜は涼しい顔で言った

『なっ！そんな事…』

《いいから早く！》

茜は無理やり桂馬の頭を膝にのせると応急処置を始めた

《あゝ、たんこぶが出来てますね…》

『…』

《青あざも出来てますね…》

『…』

《あの…スイマセン…顔が真っ赤ですけど…》

『お前のせいなんだがな…』

桂馬は茜の膝から起き上がりながら言った

《スイマセン…いつもの癖で…》

茜は申し訳なさそうに言った

『（いつも誰かをぶっ飛ばしてるのか？）別に、蹴られたのを怒ってるんじゃない…』

桂馬は茜に膝枕をされたのがかなり恥ずかしかったらしい…

《…？まさか…膝枕？》

『…』

桂馬の顔がさらに赤くなった

《クスツ、桂馬君ってピュアなんだね》

『うるさい！もう蹴られるのは嫌だぞ！…そういえばなんで茜はいつもここにいるんだ？』

《私、いつもここには夕日を見に来るんだ、桂馬君はなんでここに？》

『…インターネットに繋がりやすい…』

《…？》

『それに静かだ…そろそろ僕は帰る、じゃあな』

桂馬はそう言い残し屋上から出た

桂馬の家

『二度ほど会ったがボコられたただけだな…おいエルシィ！』

「はい！なんですか神様？」

『このメモに書いてる物を明日の放課後までに用意してくれ』

『…あいつの心の隙間…原因は多分アイドルとしての自分だ、
ま
ずはあいつのアイドル姿を見るか…』

FLAG 15…茜の歌(前書き)

ヒイラギ アカネって読みます

FLAG 15…茜の歌

次の日の昼休み

エルシイは桂馬に頼まれたあるものを作っていた

「…よし！出来ましたよ！にーさま！」

『よし、後は茜だな…』

…そして放課後の屋上…

《今日も桂馬君来るかな？》

『もう来てるぞ』

《桂馬！…君？その後ろのやつはなに？》

茜は桂馬の後ろを指差し言った

『ん？これか？これはどこからどう見てもライブセットだろ？』

桂馬は平然と答えた

《いや、なんで…》

『茜の歌…ちゃんと聞いて見たいんだ』

《わ、私の歌？無理だよ、私制服だし…》

『ほらよ』

桂馬は持っていた紙袋を投げた

《うわっ！…なにこれ…可愛い衣装…》

『知り合いに作ってもらったんだ、このライブセットも、さあ、それに着替えて早く歌ってよ』

《でも…》

『…』

《わかった！わかったよ！歌うよ…歌えばいいんでしょ！》
半分ヤケになつた茜が言った

《とりあえず着替えるから…向こう向いて！》

『やれやれ…』

桂馬は夕日の方を見た

《…もういいよ…》

『全く、着替えるのにどれだけの時間がかかってるんだ…ゲームならほんの一瞬だぞ』

桂馬はぼやきながら茜の方を向いた

《似合うかな…？》

『…！』

桂馬は声が出なかった、普段はメガネをかけ、どちらかという土地味な顔をしている茜だが、今はメガネを外し、髪を後ろでくくり、エルシィが作った服を着ている

《そんなに見つめられると恥ずかしいよ／＼》

《…じゃあ歌うね…聞いて下さい》

World God only knows

《～》

『（驚いた…顔も可愛らしいし、歌も下手じゃない…しかし、何か足りない…その足りない何かを見つけないと茜の心の隙間は埋まらない…しかし…何が足りないんだ？）』

《…どうだった？私の歌？…》

茜は尋ねた

『とても良かったよ』

《本当！？ありがとう！私、もっと頑張ってかのんちゃんを越えるアイドルになるよ！！じゃあ今から仕事だから！バイバーイ！》
茜は元気に屋上から飛び出して行った…

『…かのんを越える…か…』

FLAG16…トップアイドル

鳴沢テレビ局…一階ロビー

今日は音楽番組の収録があった

《お疲れ様です》

スタッフに声をかけ、茜はテレビ局を出ようとする

茜ちゃん！

誰かに呼び止められ、茜は振り向いた

《…かのんちゃん…》

そこにはトップアイドルのかのんがいた

《国民的アイドル賞受賞おめでとう…》

ありがとう！ねえ今度一緒に買い物でも…

「おっ、かのんちゃん！撮影お疲れ様！」

かのんの声は、ディレクターの声に遮られた

《…みんなかのんちゃんばかり見て…どうして私を見てくれないの…？》

茜はそう言い残すとテレビ局を出て行った

次の日の放課後…

『屋上に行くか…』

授業も終わり、桂馬はカバンを持ち、教室を出ようとした

「オタメガ、オタメガ！」
クラスの男子に呼び止められた

『なんだ？僕は忙しいんだ』

「お前に頼みがあるんだよ！」

『？』

そのころ茜は屋上にいた

《…》

『すまない、遅れた』

《桂馬君！も、遅いよ！》

『いろいろあつて…横座るぞ』

桂馬は茜の横に座った

『…』

《…》

『今日はやけに静かだな？』

桂馬は尋ねた

《…え！な、何でも無いよ！》

茜は明るく振る舞った

『そうか？そういえば昨日撮影だったんだろ？』

《…うん》

『お疲れ様』

《…そう言ってくれるの桂馬君だけだよ…みんなかのんちゃんばかり…みてる！絶対かのんちゃんを越えてトップアイドルになつてやる》

『…お前は何のために歌ってるんだ？』

《えっ？何のため？》

『かのんはみんなを笑顔にするため歌っている、みんなを幸せにするために歌っている…だが茜、お前は…』

《う…うるさい！》

『ずっと考えてた、歌も顔もトップクラスのお前がなんでかのんに勝てないか…かのんと茜…なにが違うか』

《…？》

『かのんは歌う事を楽しんでいる、だがお前はどうか？誰かを笑顔にしたいと思つて歌っているのか？』

《私だって歌手になりたての時はみんなを幸せにしたいと思つてた！だけど…みんなかのんちゃんばかり見て私の事見てくれない！》

『…』

桂馬は無言のままポケットに入れていた手紙を取り出した

《これは…？》

茜は桂馬に聞いた

『さつき教室でクラスの男子に渡されたんだよ…お前のファンだそうだ、それでもお前は誰も見てくれないなんてほざくつもりか！？』

《…私、ファンの人達のために頑張る！私を応援してくれる人がいるんだから！私も応えたいと！》

茜はとびつきりの笑顔をみせた

《ありがとう…桂馬君、大切な事を思い出させてくれて…これはお礼だよ！》

茜は桂馬の唇に唇を重ねた…

FLAG 17 : AKANE

SONOGO (前書き)

茜編、コレにて終了！

FLAG 17 : AKANE SONOGO

鳴沢テレビ局…

《お疲れ様〜！》

茜は元気よくスタッフに声をかけた

「おっ！お疲れ様茜ちゃん！今日も歌上手だったね〜」

《本当ですか！ありがとうございます！！》

「最近調子いいね〜、恋人でも出来た？」

《そんな人…（あれ？つい最近、ずっと誰かといたような…）》

「…どうしたの？茜ちゃん？急に黙り込んで？」

ディレクターが心配そうに声をかけた

《いえ！何でも無いです！私、そろそろ行きますね、お疲れ様でした〜》

茜はテレビ局をでた

桂木家…リビング

「神様！テレビで茜ちゃんが歌ってますよー！」

『アイドルなんだからテレビにでるのは当たり前だろ…』

桂馬は呆れながら言った

「うっ！可愛いなあ茜さん！残念ですね…神様…茜さんに忘れられ

て…」

『…いいんだよ、あいつはこれから沢山のファンに愛されるんだ、僕がいたら邪魔になる…』

桂馬は少し寂しそうに言った

「…そういえば！次はもう少しいい役を下さいよ〜！」
今回のエルシィは衣装とセット作りのみ

『…お前じゃあ無理だな…』

茜編…end

FLAG18…図書室での悲劇

桂木家…

いつも通り日が昇り朝がやって来た

「にーさま〜！そろそろ学校行きましょうよ〜」
エルシイが桂馬をせかす

『うるさい！今日はどのゲームを持って行くか考えてるんだ！邪魔をするな！！…これにするか…いや、こっちもいいな…よし！これに決めた！』

桂馬がやっとゲームを決めて部屋から出て来た

「遅刻しちゃいますよ！急ぎましょう！」
桂馬とエルシイは急いで家を出た

…学校…

「はあはあ…なんとか間に合いましたね…にーさま」
息を切らしながらエルシイは桂馬に言った

『…』グツタリ

桂馬は喋る元気さえなかった

「運動不足過ぎですよにーさま…」

…放課後…

『ふ〜、今朝は酷いめにあっただな…』

「にーさまのせいですよー！」

『…とりあえず帰るぞ』
桂馬は教室を出た

「あつ！にーさま！図書室に寄りたいたんですけどいいですか？」

『…好きにしろ、僕は先に帰る』

桂馬は上履きからシューズに履き替えながら言った

「…今朝、大変だったなあ…私だけならもっと早く学校についてたのになあ…」

『…』

…図書室…

『早く本探して来い！』

結局桂馬は図書室に来ていた

「は〜い！」

エルシイは本を探しに行った、

『たく…しかしここは…広いな…』

桂馬の通う学校の図書室は以上にでかく、そこらの図書館にも負けないくらい本が揃っている

『…ゲームでもするか…』

「う〜ん…どれにしましょう…」

エルシイは何冊か本（といっても消防車の図鑑）を見つけてどれを借りるか悩んでいた

「…よし！これにしよう！」

エルシイは選びに選んだ一冊を借りに行った

『…』

「にーさま！遅くなりました！」

エルシイは桂馬のもとへ駆け寄って来た

『遅い！早くかえ…』ドーン！！！！

《キャア！》

『うわっ！』桂馬は誰かとぶつかりしりもちをついた

「大丈夫ですか！？にーさま？」

エルシイは心配そうに声をかけた

『ああ！僕のPFPが！』桂馬のPFPは、しりもちをついた時に下敷きになり、粉々に砕けていた

《えっと…あの…その…『じ』『じ…』》

ドロドロドロドロ

突然！リーダーがなりだした

《キャア！》

少女は逃げて行ってしまった…

「にーさま！駆け魂…」

『僕のPFP…』

桂馬はエルシイの声も耳に届かない

「も〜にーさま！とりあえず帰りましょー！
エルシイと桂馬は図書室を出た

FLAG19…少女の過去（前書き）

こんなに個人情報話す先生はなかなかいませんね（…）

FLAG 19…少女の過去

桂木家、リビング…

「にーさま！あの子の駆け魂を出して下さい！」

エルシィは桂馬に言う

『うるさい！あいつは僕の命（PFP）を壊したんだ！なのに謝らずにどっか行きやがって！』

桂馬はPFPを壊されたことをまだ怒っているらしい、

「ぶつかってきたのはあの子ですけど…踏み潰したのはにーさまじゃないですか！」

『…うるさい！もう僕は寝る！あいつは絶対攻略しないからな！』
痛い所をつかれてしまった桂馬は部屋に戻ってしまった…

「あつ！にーさま！…！」

次の日、学校…

「にーさま！お願いしますよ！」

『しつこいぞ！何度言われても嫌なものは嫌だからな！』

「うっ…」

エルシィは黙り込んでしまった

「桂木！そこどいてえ！」

「ん？」「ドゴーン！」

桂馬は避ける間もなく、ロケット並みのスピードで走ってくる女子にぶつかった

「ぶくお！」

桂馬はぶつ飛んだ！

「イタタ…ごめん桂木…ブレーキの限界超えてた！」
ぶつかった本人は案外大丈夫そうだった

この子の名前は高原歩美、桂馬がはじめて攻略した女子である

「ごめん桂木！私急いでるんだ！またね！」歩は瞬く間に見えなくなった

「だ…大丈夫ですか…にーさま！おでこに大きなたんこぶができてますよ！保健室に行きましょう！」

どうやらぶつかった時に打ちつけたらしい…

「なんで…リアルな女はどいつもこう…なんだ…」

桂馬はボヤいた

…保健室…

「失礼します」

桂馬は保健室のドアを開けた、中には保健の先生と昨日、図書室で会った女の子がいた

「お前は昨日の！僕のPFPをどうしてくれる！」

桂馬は女の子に興奮気味に言った

《キャア!》

女の子はエルシイの横をすり抜け、ドアから出て行ってしまった…

『あつ！おい！…なんだよあいつ…』

「にーさま…」 「桂木…」

エルシイと先生が冷たい目で桂馬を睨む…

『僕が悪いのか!?!』

「先生、今の子は…?」

エルシイは桂馬を無視し、先生に尋ねた

「ああ…あいつは大宮綾香オオミヤアヤカって言うんだ…中等部の時から大人しく

物静かな奴だったんだが…両親が事故で亡くなってしまって祖父母の家に引き取られて以来…誰にも心を開かなくなってしまった…」

「御両親が…」

エルシイが辛そうに言った

「今じゃ授業にも出ようとしない…お前もなるべく声をかけてやってくれ」

二人は無言で頷いた

「ところで桂木…おでこどうした？」

…帰り道

『…エルシイ、綾香の情報を集めてくれ』

桂馬がエルシイに言った

「にーさま…」

『…』

「じゃあ明日、学校で情報を集めてみますね！」

こうして桂馬の攻略が始まった

FLAG 20…不登校児と落とし神

綾香の祖父母の家…

《ただいま…》

「あら綾香ちゃんお帰り！随分遅かったわねえ！」
綾香のおばあちゃんが声をかけた

《うん…いろいろあつて…ご飯の時間まで寝てるね》
そう言い残し、綾香は自分の部屋に上がって行った

《謝るべきだったよねあの人に…はあ…》

綾香は勉強机に座り昨日の事を思い出していた

《せっかく会えたのになあ…》

どうやら綾香も桂馬の事を気にしていたらしい

《どうしたらいいかな…お父さん、お母さん…》

綾香は机に立てかけていた写真を手にとり呟いた
その写真には幼い綾香と、優しく微笑むお父さんとお母さんの姿が
あつた

…次の日、学校

『エルシィ、僕は保健室に行ってくる』

「えっ！どこか悪いんですか！」

『違う！綾香に会いに行くんだ』

「綾香さんがなんで保健室にいるって分かるんですか？」

エルシイは桂馬に尋ねた

『お前は何も分かっていない…どんなゲームでもあんな感じのキャラは保健室か図書室にしかないんだ！図書室はまだ開館していない…つまりあいつは保健室にいる…！』

…桂馬お得意のゲーム理論である…

『とりあえず僕の羽衣に授業を受けさせておいてくれ…保健室…』

『失礼します』

桂馬は保健室のドアを開けた

「おお、桂木か、どうした？」

先生が優しく尋ねた

『ちょっと気分が悪いので…ベッドで寝てていいですか？』

桂馬はわざとらしくしんどそうに言った

「うゝむ…それは心配だな…だが先生はコレから出張があつてな…一人で大丈夫か？」

先生が心配そうに尋ねる

『一人で大丈夫です…（むしろ都合だな）』

桂馬は心の中でほくそ笑んだ

「そうか？先生はそろそろであるが、なにかあつたら他の先生を呼べよ」

そう言い残し、先生は保健室を出た

『さてと…一応体調不良って設定で来ているんだ、ベッドで寝てるか…』

そう言うと桂馬は一番奥にあったベッドに寝転がった
布団からは微かにアルコール消毒液の匂いがした

『…ゲームでもしてるか』

『…』

どれくらい時間がたっただろう…ドアが突然開いて一人の少女が入
って来た

桂馬は体を起こしてドアの方に目を向けた、そこには綾香がいた

『（やっぱり来たか…）』

《…あれ？えっと…？》

綾香も桂馬の存在に気づいたらしい。オドオドしていた

『どうしたの？』

桂馬はなるべく優しい感じで尋ねた

《…えっと…あの…そのベッド…何時も私が…その…使ってい
て…あの…》

『ああごめん、じゃあどくよ…ヨイシヨット』

桂馬は今まで寝転がっていたベッドから一つ横のベッドに移った

《…えっと…その…ありがとうございます…ごさいます…》

『別にいいよ、寝られればどこでも』

桂馬はそう言うと再びゲームを始めた

《…》

綾香は無言でベッドの中に入った

FLAG 21…不登校児と落とし神(その2)

《(この人、この前図書室で会った人だよ…どうしよう…ぶつかった時、何か壊しちゃったみたいだし…)》

『別にPFPを壊した事はもう気にしてないよ』
桂馬は仰向けでゲームをしながら言った

《(なんでこの人は私の考えてる事が分かるの!?)》
綾香は驚いて桂馬の方を見た

『あと、先生なら出張でいないよ』
桂馬はゲームをしながら綾香に言った

《…》

『聞いている?』

《えっ!はい!あの…その…先生が…いないのは…いつもの事ですから…》

綾香はオドオドしながら言った

『どづいつこと?』
桂馬は綾香に尋ねた

《えっと…その…先生はいろんな雑用を引き受けちゃって…いろいろ動き回っていて…保健室にいる…ほづが珍しいです》

『ふーん…(そんな感じで大丈夫なのか?ここは?)』

桂馬は疑問に思ったが声に出さなかった

『じゃあもし、けが人が来たらどうするの?』

桂馬は綾香に尋ねた

《えっと…軽いけがなら…私が手当てしています…》

『へえ…すごいね』

《そんな…すごいなんて…こと無いですよ》

綾香はベッドに腰掛け、俯きながら言った

『…そんな事はないと思うよ、誰かの役にたってるじゃないか』

《…そう…ですかね…》

『そっだよ!』

桂馬も起き上がって言った

《…》ポツ…

『…そろそろ僕は教室に戻るよ…じゃあまた明日』

そう言つと桂馬は保健室を出た

綾香は一人になった

《不思議な人だったな…それに何だろうこの感じ…分からないや…》
綾香は誰もいない空間に向かって呟いた

FLAG 22…不登校児と落とし神(その3)(前書き)

お色気のターン!

FLAG 22…不登校児と落とし神(その3)

朝、全校集会…

「〜であるからして〜」

桂馬の通う学校は一週間に一度、全校集会があり、校長先生の長い話を聞かされる…

『やっと話が終わったか…相変わらず長い話だな…とりあえず、遅くなったが僕は保健室に行く、エルシィ、後は頼んだぞ』

「了解です!」

…保健室…

桂馬は保健室のドアを開けた所で固まった

目の前で、上半身下着姿の綾香がいたからである…

『…何だ?この悪意のあるお色気イベントは?…』

桂馬は呟いた

『キヤア!な…なんで今入って来るんですか!せ…せめてノックぐらいして下さい!』綾香は布団で体を隠しながら言った

『なんで着替えてるの?』

桂馬は尋ねた

『制服のままで寝ちゃったらしわが出来ちゃうでしょ!とりあえず!向こう向いて下さい!』

『なるほどね…でも昨日は着替えてなかったよね?』

桂馬はドアの方を向きながら綾香に尋ねた

《昨日はあなたがいたから着替えられなかったんですよ!》

『…あなたじゃないよ…僕の名前は桂木桂馬だ』

桂馬は言った

《あっ…ごめんなさい…》

『いや、別に怒ってるんじゃないよ、ただ綾香ちゃんに僕の名前を呼んでほしただけ』

桂馬は優しく言った

《…桂馬さん、もう大丈夫ですよ》

綾香は少し緊張気味に桂馬の名前を呼んだ

桂馬は振り返って綾香の隣のベッドに寝転がった

『…ごめんね、着がえ中に入っちゃって』

桂馬は綾香の方を向きながら言った

《…いえ…大丈夫です…あの…見えました?》

綾香も桂馬の方を見つめ、言った

『見えたって何が?』

桂馬は尋ねた

《…えっと…その…下着…とか…》

綾香は顔を真っ赤にしながら言った

『ああ下着ね、青の水玉』

…どうやら桂馬はデリカシーの欠片さえなかったらしい…
一応こういう場合、見ても見てないと言つべきだと思つが…

《（やっぱり見えてたんだ…）》

綾香はさらに顔を真っ赤にした

『顔真っ赤だよ？熱でもあるの？』

そう言つと桂馬は起き上がり、熱を計るためなのか、自分のおでこを綾香のおでこにくつつけた！

《…！》ドキン！

『やっぱりすごく熱いよ』

桂馬はおでこを離して言った

《だ…だれのせいでこうなつたと思つてるんですか！？》

綾香はテンパリながら言った

『…っ。』

桂馬はよく分かっているらしい

《もう！私は寝ます！》

そついつと綾香は布団に潜り込んだ

『じゃあ僕は教室に戻るよ…じゃあね』

桂馬は保健室からでて行った

《（心臓がバクバクして、頭の中がぼーっとする…どうしちゃったんだらう私？…）》

《(…明日も来るかな？桂馬さん…ってなんで私こんな事を考えてるんだろっ！？もう寝よう！)》
綾香は目をつぶった

FLAG 23…綾香の心

学校…

いつもと同じく桂馬は保健室に向かった

コンコン

『失礼します』

昨日とは違い、ノックをしてから入った

《今日は…ちゃんとノックしてくれたんですね…》

『まあね…（昨日みたいになったら困るし…）』

流石に桂馬も昨日の事は予想外だったらしい

『（まあ結果的に二人の心の距離を縮める結果になったんだし、よしとするか…）』

桂馬はベッドに横になった

相変わらず先生はいないらしい…

《…》（…）

…長い沈黙…

《（あれ？今日は先輩話し掛けてこないな…？何か私、怒らせるよ
うなことしたっけ？もし怒らせちゃったなら謝らないと…でも…）》

『（…よし！謝ってみよう！）あの！』

綾香はベッドから起き上がり、桂馬の方を見た

『…ZZZ』

…桂馬は寝息をたてて寝ていた…

《なんだ…ただ寝てただけか…》

ホッと一安心、綾香は胸をなで下ろした

《（…そういえば先輩の顔、よくみたことなかったな…先輩は寝てるんだし…別にいいよね？）》

綾香はベッドから降りて桂馬の寝ているベッドまでよって来た

《（あんまり先輩の顔、じっくり見たことなかったけど…お人形みたい…）》

綾香は桂馬の顔を見つめ、思った

そのとき！

突然ドアが開いた！

《…！！！！》

綾香は一目散に自分のベッドに避難した

『うーん…あれ？先生？なんでここに？』

「いや…一応保険医なんだからここに来るのは当たり前だろ…それより大宮、今日配布の手紙だそうだ、担任の先生から渡された」
そう言っ先生は手に持っていたプリントを渡した

《ありがとございます…》

そう言っ綾香はプリントを受け取り、一通り目を通した

《…！！》

綾香の表情が一瞬曇った

『…?』

その一瞬の変化を桂馬は見逃さなかった

《すみません…ちょっとお手洗い行ってきます…》
そう言い、綾香は保健室を出て行った

『先生…なんのプリントを渡したんですか?』
桂馬は先生に尋ねた

「なんのプリントって…学校新聞と…今月の予定表と…保護者参観のお知らせだが?」

『保護者参観…?』

「そうだ…ってもうこんな時間か!桂木、もう一度私はでるから…
安静にしておけよ!」
そう言い残し、先生は出て行った

『…保護者参観…不登校児…なるほど、エンディングが見えたぞ!』

FLAG 24…綾香と桂馬(前書き)

特にタイトルに意味はありません(････)

FLAG 24…綾香と桂馬

先生が保健室を出て、少しすると綾香が戻ってきた

《あれ…先生は…？》

『また出て行ったよ、本当に忙しい先生だね…』
桂馬は呆れ気味に言った

《そうですね…少し眠たくなったので寝てますね…おやすみなさい》
そう言っていると綾香はベッドに寝転んだ

『おやすみ』

《スースー…》

すでに綾香は寝息をたてていた

『眠る早さはの 太なみだな…』

桂馬は呟いた

《…ここ…は？》

綾香は真っ暗な場所にいた

《真っ暗で何もみえな…》

「綾香」

綾香の後ろで名前を呼ぶ声がした

綾香は恐る恐る振り向くとそこには…

《お父さん！お母さん！》

綾香の最愛の両親が微笑んでいた

《会いたかった!》

綾香は二人に抱き付こうとしたがまるで足が地面に縫い付けられたかのように動けなかった

「綾香…元気でな…」

両親は悲しそうな顔をして、綾香から遠ざかって行った

《待つて!置いてかないで!お父さん!お母さん!》

綾香は腹の底から叫んだ

《イヤ…イヤだよ…》

綾香は泣き崩れた

『綾香…綾香!』

桂馬は綾香の体を優しく揺すった

《桂馬さん…?》

『凄くうなされてたから心配したぞ』

どうやら今までののは夢だったらしい

《…》

『…どうした?』

《…うう…うわぁーん!》

綾香は突然桂馬に抱きついて泣き出した

『なっ！いいい…いきなりどうした！』

《お母さん…お父さんに会いたいよ！》

綾香は泣きじゃくりながら言った

『両親に…？』

《会いたいよ…もう一度…夢の中でもいいから…》

綾香は言った

『…お前はいつまで両親の死を悲しんでいるつもりだ？』

桂馬は綾香の背中に手を回し、言った

《…えっ？》

『綾香が悲しんでいるのを両親が天国から見て喜ぶと思っているのか？』

桂馬は優しく、しかしどこか厳しく言った

《…》

綾香は桂馬の胸に顔をうずめた

『きっと両親も綾香が立ち直って幸せに生きることが望んでいると思っよ』

桂馬は優しく言った

《…そう…ですよね…》

『きっとそうだよ』

桂馬は微笑んだ

《…桂馬さん…》

綾香は桂馬の胸から顔を離した。まだ目は真っ赤だ

《…ありがとう…》

綾香は桂馬の唇にキスをした

FLAG 25... AYAKA SONOGO (前書き)

綾香編終了です

FLAG 25... AYAKA SONG O

学校…

《…》

綾香は自分の教室の前にいた

《（ひ…久しぶりに来てみたけど…妙に緊張する…）》

《（やっぱり保健室に行こうかな…ううん！今日は頑張るって決めたじゃない！よし…）》
ガラガラと、教室のドアを開けた
みんなの視線が集まる…

《お…おはよう…》

綾香は恐る恐る言った

「オハヨー！」「おはよー！」「おはようさん」
教室にいた生徒が口々に言った

《…！（良かった！大丈夫だった！ありがとう！…って一体誰にお礼言ってるんだろ？）》

「どうした？お前の席なら個々だぞ」
男子生徒が指を指した

《ありがとう（まあ…いいか…）》
所変わって保健室

「来ませんねえ、綾香さん…」

『あいつなら授業でも受けに行っただろ』

桂馬がベッドに寝ころびながら言った

「ええ！にーさますごいです！」

エルシイは桂馬の方を見ながら言った

『僕を誰だと思っっているんだ？』

桂馬もエルシイの方を見た、するとある事に気がついた

『エルシイ、掛け魂リーダーはどうした？』

「えーと…ちょっと調子が悪くて修理に出してます…」

『なっ！あれが無いと駆け魂がどこにいるか分からないだろ！』桂馬は怒鳴った

「うう…スイマセン…」

『もういい！』

そう言つと桂馬は布団に潜り込んでしまった

「私…授業に戻りますね…」

エルシイは保健室から出て行った

「またにーさまに怒られた…」

エルシイは授業に行かず、屋上に来ていた

「はあ…私って本当にダメな悪魔だなあ…」

エルシイは溜め息をついた

そのとき、エルシイの体に半透明な塊が吸い込まれた！

「ん？なにか一瞬変な感じがしたような……気のせいかな？
あつ！そろそろ授業に行かなくちゃ！」
エルシィは屋上を飛び出した

FLAG 26…エルシィの憂鬱

桂木家、カフェグランパ…

今日は休日、学校の授業もない

『ふぁー…眠たい…』

桂馬は昨日も夜遅くまでゲームをしていたので寝不足気味だ…

「あつ！にーさまおはようございます！朝ご飯作ってますよ！」

そう言つてエルシィが指をさした先には正体不明の黒くうごめく謎の物体があつた…

『な…なんだこれ？』

桂馬は恐る恐る尋ねた

「はい！それは私の得意料理の一つである地獄イカ墨パスタです！
そう言い終わる前に謎の物体は桂馬の方へ無数の触手（というか麺）
を伸ばしてきた！

『ぬわあああ！！エルシィ！早く何とかしろ！』

桂馬は何とか麺を振り解こうと暴れているが全く弱まる気配がない

「ど…どうしましょう…」

そのとき！突然カフェの入り口が開いた

「こんにちは〜」

「ハ…ハクア！」

そこにはエルシィの親友である、ハクアが立っていた

「久しぶりねエルシイ、元気そうじゃない！」

「ハクアも元気そうで何よりだよ！」

二人は世間話を始めてしまった

『いいから僕を助ける！』

「…あつ…忘れてた」

『ゼエゼエ…』

何とか触手生物を処分し、桂馬は無事解放された

「あのにーさま？」

『お前って奴は…僕をどれだけ苦しめるつもりだ！』

「うう…」

「まあまあ、落ち着いて…」

ハクアが桂馬をなだめるが、桂馬は聞く耳持たない

『やっぱりお前はバグ魔だ！』

桂馬は言った

ガーン！

エルシイは深いショックを受けた！

「…！」

ハクアは頭を抑えた！

『とりあえず…僕は部屋に戻る！』

そう言くと桂馬は部屋に行ってしまった

桂馬の部屋…

「桂木、ちよつといいかしら？」
ハクアは桂馬の部屋に入って来た

『何だ？今僕は忙しい』

桂馬はベッドに寝転がり、ゲームをしていた

「ハイハイ分かったわよ…結論から言うわよ…」

「エルシイに駆け魂が取り憑いてるわ」

『…は？今なんて言った？』

「だからエルシイに駆け魂が取り憑いてるの！」
ハクアはさつきより大きな声で言った

『な…なに　　！！』

「今エルシイはレーダーを持ってないから自分の中に駆け魂がいる
って分からないんでしょうけど…って桂木！ちゃんと聞いているの！
？」

ハクアは桂馬に言った
しかし桂馬は…

『…な…なんという事だ…』
全くハクアの言うことを聞いていない…

「ねえ、桂木…エルシイを助けてあげてよ」

『…分かったよ…』

こうして桂馬のエルシィ攻略大作戦は始まったのであった

FLAG 27…突然変異？

「じゃあ私そろそろ帰るわ…」

ハクアは部屋を出ようとドアノブに手をかけた

『待てハクア』

部屋から出ようとするハクアを桂馬は呼び止めた

「…？なによ？」

『ハクア、今日から少しの間、僕の家泊まれ』

「…は？」

ハクアは一瞬桂馬の言うことが理解できなかった

「ええ　　！」

どうやら桂馬の言うことが理解出来たらしい

『いちいちうるさい奴だな…いつ駆け魂が出るか分からないんだ、だからハクア、エルシイ攻略中は僕の家泊まれ』

桂馬は平然と言った

「そんな！そんな事出来ないわよ！私にも相棒がいるんだし…」

『別に僕の相棒になれとは言っていない。エルシイ攻略の間だけだ。それともお前はエルシイがどうなっても良いのか？』
桂馬は半分脅すように言った

「うう…分かった！分かったわよ！泊まれば良いんでしょ！泊まれば！」

ハクアはやけくそ気味に言った

そんなやりとりをしている一方で、エルシイはと言うと…

「よし！今からお昼ご飯を作りましょ！」案外元気そうにお昼ご飯を作るうとしていた

「よし！オムライスでもつく…あれ…なんだか…眠…たくなって…」

バタン

突然エルシイは強力な眠気に襲われ、床に倒れ込んでしまった

「…今何か下から音がしなかった？」

「音？確かに聞こえたような…とりあえず行ってみるか…」

二人は階段を下り、音の正体を確かめに行った

リビングに入り、まず二人が目にしたものは床に倒れているエルシイの姿だった

「エルシイ！」

「おいエルシイ！大丈夫か！？」

二人はエルシイに駆け寄り声をかけた

「…ううん…」

「良かった、大じよ…」

「おはようございます神兄様、ハクア様、今すぐ昼食をお作りしますので暫くお待ち下さい」

エルシイは何時もとは雰囲気は全く違っていた

「…！」

「…！」

桂馬とハクアは驚きを隠せずにいる

「（ねえ桂木、エルシイが何か変よ…）」

「（そんなの見れば分かる！）」

二人はエルシイには聞こえないような小さな声でヒソヒソと話している

「…？どうかなさいましたか？」

「ええっと…そうだ！お料理私も手伝うよ！」

急に声をかけられたハクアは慌てふためいていた

「いえ、お客様に手伝わさせるなんて…どうぞソファアにお掛けになつてお待ち下さい。後でお飲み物をお持ちいたしますので」
そう言い、エルシイは台所へと向かった

「…」

「…」

桂馬とハクアはエルシイが去った後も啞然としていた

FLAG 28…二人のエルシィ

「神兄様、ハクア様、昼食が出来ました」
エルシィがリビングに料理を運んで来た
そこで見たものは…

「す…凄い！めちゃくちゃ美味しそうじゃない！」

「お褒めに預かり光栄です」

「（なんか…調子狂うなあ…）」

「どうかなさいましたか？」

「いや！何でも無いわよ！いただきます」
ハクアはオムライスを一口食べた

「お…美味しい！」

「…！」
ハクアも桂馬も驚いた。何時もはエルシィの料理を拒む桂馬でさえ
食べている

「…」

「…」

それからは、二人は無言でオムライスを食べ続けた

「…」

桂馬はちらっとエルシィの方を見た。エルシィも自分の作ったオム

ライスを食べている

『（コイツは確かにエルシイだ…）』
今、桂馬の目の前にいるのは紛れもないエルシイ本人である

『（エルシイの心の隙間は何だ？エルシイはどちらかと言うと小さな悩み事なら気にしないタイプだが…）』

「どうかなさいましたか？お口に合いませんでしたか？」
エルシイは心配そうに桂馬を見つめた

『いや、美味いよ…』

桂馬はエルシイの料理を誉めた

すると…

「本当ですか！よか…った…」バタリ
エルシイは再び倒れた

『おいエルシイ！大丈夫か！』

「エルシイ！」

「…ううん…あれ…にーさま、ハクア…」

『（何時ものエルシイだ…）』

「私、料理を作ろうとして…そこで急に眠たくなって…ってあれ？
もう料理が作ってある？」

エルシイは頭を押さえて起き上がった。まだ頭が痛むらしい

『さっき作ってたじゃないか、ちょっと疲れてるんじゃないのか？』

少し休んだ方がいいと思うぞ』

「…分かりました、そうしますね…」
そう言うとエルシィはフラフラとした足取りで自分の部屋まで上がっていった

『…いよいよ分からなくなってきたぞ…』 桂馬は大きな溜め息をついた

FLAG29…桂馬の気持ち(前書き)

更新遅れてスイマセンp)、q)

FLAG 29…桂馬の気持ち

『今分かっている情報をまとめるとだな…』
桂馬は紙とペンを取り出した

- 1、エルシイに駆け魂が入っている
- 2、エルシイの駆け魂の力は性格などが入れ替わる
- 3、いつ入れ替わるかは不明
- 4、入れ替わっている間の記憶は無いらしい

『コレぐらいか…はあ…』
再び大きな溜め息…

『いくらなんでも情報が少なすぎる、これじゃあ分からないぞ…しかも…』

「しかもって何よ？」

『仮に普通のエルシイを表エルシイ、駆け魂の力で出来たエルシイを裏エルシイとする』

『表エルシイが裏エルシイに入れ替わっている間の記憶は無いんだ、いくらあのエルシイだってそう何回も記憶がとんでたら異変に気付くだろう』

「なるほど…」

『この攻略は短期戦に持ち込まないとマズい…長引けば長引くほどこっちが不利になる』

桂馬は紙を小さく折りたたんでポケットに入れた

『とりあえずだ…ハクア、お前はエルシイから情報を集めてくれ』

「集めろって…どうすればいいのよ？」

『とりあえず、調子はどう？とか、変わった事はない？とか、駆け魂の事がバレない程度の当たり障りのない会話でいい』

「当たり前障りのないって…無理難題を…」

ハクアはブツブツ文句を言っている

『お前の方がエルシイだって話をしやすいだろう』

「…分かったわよ…」

ハクアは部屋を出て行った

『エンディングを見るにはまだ情報が必要だ…頼んだぞ、ハクア…』

『…さあ、僕も準備に取りかかるか…』

一時間ほどしてハクアが戻って来た

『エルシイは？』

「今はぐっすり寝てる」

『そうか…何か分かったか？』

「えっと、私が聞いたのは体が少しおかしいわ…近心が重いつて…」

桂馬はそれを聞いて再び紙を取り出し書いた

「それと急に眠気に襲われる事があるらしいわ」

『急な眠気…』

「大体私が聞いたのはコレぐらいよ」

5、心が重たい

6、急な眠気に襲われる事がある

『ふむ、少しずつだがモノローグが見えてきたな…エルシイが入れ替わるのは6番のところだ、多分急に眠くなるのも駆け魂のせいだろう』情報をまとめた桂馬は冷静に分析していた

「何であんたはそんなに冷静なのよ…大体あんたはエルシイが心配じゃないの？」

『僕が心配したところでストーリーが変わるわけじゃないだろう』
桂馬は再び手に持っていた紙を小さく折りたたんでポケットに入れた

「なっ！ヒドい！あんた自分の相棒でしょ！」

『ああ、だから僕が絶対助けてやらなきゃいけない。さっきも言ったがエルシイの攻略は時間との勝負だ。急がないと取り返しのつか

ない事になるかもしれない…だから今は悲しんだり心配している時間はないんだ！」

桂馬はハクアに力強く言った

「…なんだ、エルシイの事心配してるんじゃない」

『…うるさい』

「（以外と優しい奴じゃない）」

『とりあえず、エルシイが起きたら攻略を始めろぞ』

FLAG30…甘いケーキは不幸の味？

「おはようございます」

「あっ！エルシィおはよう、調子はどつ？」

「うん、大丈夫だよ」

『（どつやらまだ何時ものエルシィのようだ…）おいエルシィ』

「はっ、はい！」

突然桂馬に名前を呼ばれたエルシィは慌てふためいていた

『今からケーキを作る、手伝え』

「…は？」

「…え？」

二人は驚いて桂馬の方を向いた。桂馬は手に持っていたゲームをポケットに入れた

「（ケーキ作りのどこが攻略なのよ！…でもあいつが考え無しにこんな事言うはずないし…）」

「にーさまお料理したことさえ無いのに急にどつしたんですか？」

当然の反応である、桂馬はお菓子作りは愚か、包丁を握った事さえあるか分からない

しかし桂馬は…

『いいから手伝え』

そう言うと、桂馬は無理やりエルシィをカフェスペースへ連れて行

った

「本当に大丈夫か不安になってきた…」
ハクアはポツリとつぶやいた
ということキッチン

桂木家は喫茶店を営んでいるので料理道具は豊富にある

『よし、とりあえず作るケーキはショートケーキと決めている、ま
ずは材料だ』

「え〜と…ショートケーキの材料は卵に果物に砂糖…その他もろも
ろですね」

『その他もろもろってなんだ…まあいい、とりあえずメレンゲを作
るぞ。確かメレンゲは卵と砂糖を混ぜて泡立てるんだったな』

「はい！了解です！卵と砂糖ですね！」

そう言つてエルシイが取り出した物は今まで目にした事のない顔の
ある砂糖と、これまた、今まで目にした事のない不気味な卵だった

『そんな不気味な食材いらんわ！材料はこっちに準備してある！』

「そうなんですか？じゃあ置いておこうつと」

そう言つてエルシイは卵と砂糖を机に置いた
すると…

ピキピキ…パリーン！

卵がかえつて中からこれまた不気味なドラゴンらしきものが生まれ

てきた…

「ありやく…多分机に置いた時に卵にひびが入っちゃったみたいで
すね…」

『おい！何でコイツ僕を追いかけてくるんだよ！』
桂馬はドラゴンに追いかけてまわされている

「ミニドラゴンははじめに見た物を母親とします。だから神様
をお母さんと勘違いしてるんですね」

『ぬわあああ！何とかしろエルシィ！』

「何とかしろって言われても…」

『ぎゃあああ！…！』

2時間後…

『ぜえぜえ…あ…あとは飾り付けだけだな…』

「メールだよ！」

桂馬のPFPが鳴った

『ん？何だ？すまないエルシィ、先に飾り付けをはじめていて
くれ』

桂馬はポケットからPFPを取り出して外に出て行った

「はい！つてあれ？神様何か落としていきしたよ…」
エルシィは紙を拾い上げた

「えっ…なに…これ…？」

その紙にはエルシィの駆け魂のことについて書いていた

「私の中に駆け魂がいる…?」

エルシィは手に持っていた調理器具を床に落とした

その頃、桂馬は…

『ふう…少し強引だがこうする他方法が無かった…僕としたことが…
…こういう方法は僕の主義に反するんだがな…』

ガチャン!

家の中から何かが落ちる音が聞こえた

『エンディングが…見えたな…』

FLAG 31… 本当の気持ち

「そんな…私…」

『どうかしたのか?』

「神様…これ…本当なんですか?」

『…ああ、本当だ』

桂馬は冷静に答えた

「そ…そんな…私…私…」

エルシイは泣き崩れた

「私…何やっても…ドジばかりで…」

『…』

「攻略の時だって…何にも役に立たないし…」

『…』

「神様に迷惑ばかりかけて…」

『…』

「私なんていない方がいいんだ!」

『それは違う!』

今まで静かに聞いていた桂馬は声をあげた

「だ…だって…攻略の時だ…」

『僕はお前を邪魔と思った事は今までに一度もない！そしてこれからも思わない！』

「…！」

『確かにお前はドジだ！失敗も沢山する！だけどその失敗をカバーするのが相棒の役目だ！』

「…」

『お前に出来ない事は僕がする！だから…僕が出来ない事はお前に任せる、いいか？』

「…」コク

エルシイは涙でグチャグチャになりながらも首を縦にふった

『エルシイ…僕はお前のお陰で大分変わった…ありがとう…コレは僕からのお礼だ』

「…え？」

桂馬はエルシイの唇に唇を重ねた

FLAG 32...エンディング(前書き)

という事で最終回!

FLAG 32…エンディング

『今まで僕は現実リアルに関与なんてしたくないと思っていた』

『僕はゲームの世界の住人、現実リアルなんてクソゲーだと思っていた』

『しかし…どんなゲームにも理想の結末エンディングがあるように現実リアルにも最高の結末エンディングがあるはずだ』

『それがどんなに見つけるのが困難だったとしても…僕なら見つけだせるはずだ!』

『なんとと言っても僕は…落とし神なんだから』

『エンディングが…見えた!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9461s/>

神のみぞ知るセカイ(world God only knows)

2011年8月12日22時31分発行